



序

その他のタイトル	Vorwort
著者	山下 肇
雑誌名	独逸文学
巻	32
ページ	i-i
発行年	1988-06-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018320

序

この年、関大独文学会から、一つの大きな知的温もりの火が消えました。新谷浩堆教授の逝去であります。この悲しみは、いつまでも私たちから去りますまい。先年和田賀一郎教授を喪った私たちは、ここでまたもう一人の、学会の支柱・光源たるべき五十歳台のかけ替ええない重鎮に旅立たれてしまったのです。

本号は、この痛惜してやまない新谷教授のための追悼号として編まれました。最期の最期まで学会・教室のことを思い続けた新谷さんほど、細やかな気配りに思いやり深かったお人柄を私は知りません。にこやかな彼の口から出る言葉には、いつも優しい温もりがこもっていました。幼少から多病だったという彼は、研究教育の道程で人知れず深く心を磨き続けてきたのでしょう。遺稿となった周到な学論『ドイツ散文小説の起源』（関西大学創立百周年記念『文学論集』下巻所収・昭和61年11月）に、彼の真摯な良心の特質をよく偲ぶことができます。本追悼特集は、この彼の思いの高さにこたえるべき私たちの不屈な前進を誓いあう新道標となるべきであります。

仲睦まじい新谷夫妻の新居は、先年来拙宅のすぐ近くになり、バスも一緒で、すぐ夫婦して訪ねあう親しさが生れ、駅前新設ホテルのグリルの静けさと味を夫妻に推賞したりもした私です。次第に心を許してくれた彼の晴朗な口から、東大法学部受験の昔話や精神遍歴の数々の思い出話を聞くたびに、私はますます彼の清冽な聡明度・信頼度の証しを強めていました。新谷君、どうしてこんなに早く逝ってしまったのですか……。

いま私の眼底には、彼の告別式のあと、霊柩車を見送るご両親の肩を寄せあって立ちつくすお姿が灼きついています。春の吹雪の道を彼の病室に見舞った日のことも忘れないでしょう。どうか新谷さん、安らかに眠りたまえ、痛恨のなかにも、あの貴兄の懐かしくも明るい微笑の前にこそ、謹んで本号を捧げたいと思います。

昭和63年 3月

関西大学独逸文学会会長

山 下 肇